二　弟と龍樹菩薩

弟と龍樹菩薩をヒツツケて考へたり、觀音様を春子だと思つたりしなければならなくなつた彼も他人に同情されるような生き方をしては不可ないと、以前は思つてゐたんである。

彼の弟が四つでロクマクを患ひ、生れると間もなく片方の目が潰れて、それが恢癒つても斜視であり、初めて學校へ行つて習つた先生のイの字と、母が石板に書いたイの字とが、何うしても違ふと言つて泣き、弟を負ぶつて弟が泣くので、姉は弟の右の腕を引つ張つて折つた事があつた。

『弱味噌の龍雄が死んでも、あきらめるより仕方がない』と姉は言ふ。

彼の姉は彼が死んでも、構はないのでもある。

メリヤスのズボンとシャツを、姉が新らしく買つて來たのに穿きかへて、彼は十日間位、此の野田の貸間に居て靜養したいと言つた。

野田は冬休みに歸るので、一緒に國まで連れて歸つて下さいと、姉は野田に賴んだ。

今寸時した地震が搖つた。僕は矢張り彼になりかはつて、彼の事をなるべく手間どらない様に